

市大山岳会ニュース

大阪市立大学山岳会

会長 大橋秀一郎

No. 3

平成2年11月1日発行

編集：総務委員 矢倉 睦

下田勝久

1. 学術隊メンバー

学術隊隊長	依田恭二	58才	大阪市立大学教授
日本側学術隊員	神崎 護	33才	大阪市立大学助手
	下田勝久	28才	大阪市立大学大学院生
中国側学術隊員	郎 楷永	52才	中国科学院植物研究所副研究員
	孫 世洲	51才	中国科学院植物研究所副研究員
	鄭 錫瀾	54才	中国科学院地質研究所副研究員
	方 精雲	31才	中国科学院生態環境研究センター 助理研究員
報道	齊藤清明		毎日新聞社

2. 調査経路と調査内容

- 5月1日 大阪発、上海經由北京着。（飛行機）
- 5月2日 調査打合せと準備のため中国側学術隊員と会議
- 5月3日 北京発。（鉄道）
- 5月5日 青海省西寧（シーニン）着。調査資材の整理とトラックへの積込み。
- 5月8日 西寧発。（四輪駆動車3台、トラック1台）
途中、下田が神戸大寄贈のランドクルーザーを人民開放軍のトラックにぶつけ、ひんしゅくをかう。
- 5月14日 西藏自治区拉薩（ラサ）着。
- 5月15-17日 拉薩にて西藏自治区高原生物研究所など関係機関訪問。
- 5月18日 拉薩発。
- 5月19日 林芝（ニンチ）県魯郎（ルーラン）着。

- 5月20-26日 魯郎にて森林垂直分布と群落動態について調査。
5月21日火災発生。この辺から前途多難な雰囲気that漂う。
(ちなみに、この日は私の誕生日でした)
- 5月27日 魯郎発。
- 5月28日 拉薩着。拉薩にて標本、資料の整理。
- 5月31日 拉薩発。
- 6月2日 ニュラム県ニュラム着。
- 6月3-10日 ニュラムにて森林垂直分布と群落動態について調査。
毎日がハードワークで修行の様相を帯びてくる。
- 6月11日 ニュラム発。定日(ティンリー)着。
- 6月12-27日 定日・富士拉(プシラ)にて高山植生の地形分布と生理
態の調査測定。今年もチベット人には物を沢山盗まれる。
ここではジープが川の中でスタックしたり、方さんが肺水腫
になったり、散々な目に会う。
- 6月28日 定日発。方さん入院。寝ずの看病をする。
- 7月2日 拉薩着。標本、資料の整理。
- 7月5日 拉薩発。四川省成都(チョントウ)着。(飛行機)
- 7月7-10日 峨眉山(オーメイ)山にて森林植生の見学。
- 7月11-12日 都江堰市青城山の森林植生の見学。
- 7月14-15日 天全(テンシェン)付近の森林植生の見学。
(実は二郎山に行く予定が、道が崩れて断念した)
- 7月16-17日 成都生物研究所にて標本の整理。
- 7月18-20日 臥竜(ウオロン)にてパンダ保護区と高山植物の見学。
- 7月21-23日 成都生物研究所にて標本の整理。
予定が変更され、生きたい所へも行けず、退屈な毎日であっ
た。しかし、これも修行と思って耐える。
- 7月24日 成都発、北京着。(飛行機)
- 7月25-28日 中国科学院地質研究所、植物研究所、生態環境研究センター
を訪問。採取した標本・試料の同定・分析について中国側隊
員と打合せ。毎日ハードで土産を買う暇もなかった。もう、
白酒は二度と飲まないと決心する。
- 7月29日 北京発、上海経由大阪着。皆様出迎え有難うございました。

3. 調査成果について

チベットは東部の魯郎（ルーラン）およびチベット南部のネパールとの国境沿いのニェラムでは、日本の暖温帯照葉樹林から亜高山帯低木林に相当する植生帯の垂直分布を、標高差2000mの範囲にわたって調査することができた。とくに魯郎には、トウヒ属、モミ属からなる樹高40m以上の森林が広く分布しているが、この林はチベットの木材の供給地として現在伐採が進行しているため、今回の調査結果は、この地域の森林の保全・保護のための基礎的資料として役立ちそうである。また、今回得られた植生分布に関する資料と、過去に多くの研究者によって蓄積された中国・ネパール・ブータン等の植生分布に関する資料を合わせることで、ヒマラヤ東部の森林植生の全体像を把握することができるだろう。

チベット中部の定日（ティンリー）では、標高4500mから5400mの高山草原で、地形・土壌と植生の相互関係を調査し、また標高5300mの、植物の分布の上限に近い厳しい気候環境下に成立しているクッション植物群落では、クッション植物の固体群構造、植物体の構造、蒸散特性、呼吸特性についての調査・測定を行った。ヒマラヤの北側斜面の高山草原についての研究としては、世界的にも初めての詳細な試みをほぼ初期の目的通り完了することができた。

定日では農業活動の上限にあたる4500m地点で、一つの農村を対象に農耕・牧畜と自然環境の関係について、人間生態学的な調査も行った。

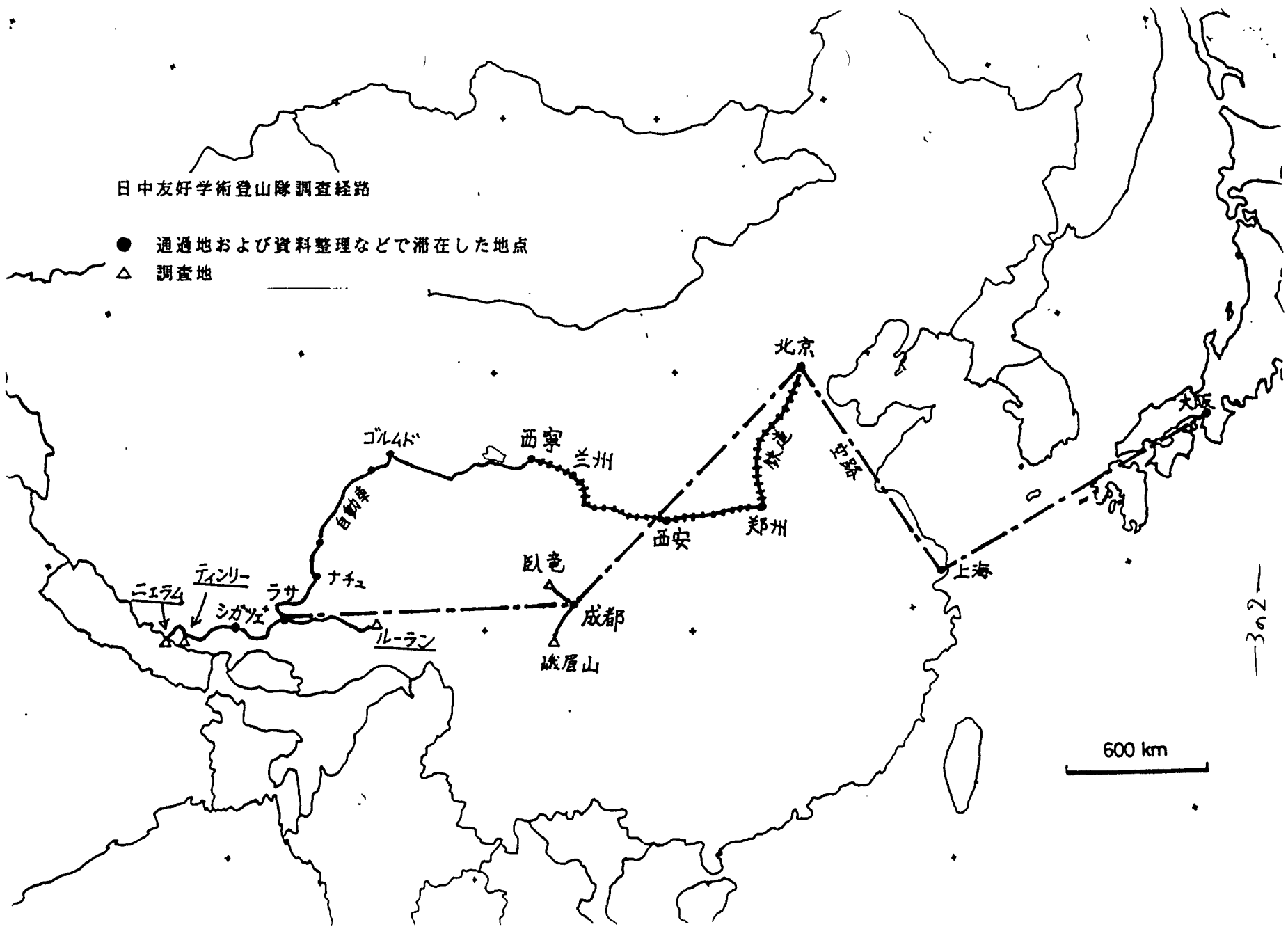
採取した植物標本は875点、その他球果・果実、樹木の年輪解析のための試料など150点、土壌試料150点近くを採取した。今後中国科学院植物研究所、生態環境研究センターと共同で、これら標本・試料の同定・分析を終えた後に、植物地理学、植物生態学、人間生態学、土壌学関係の学会誌に発表する予定である。

とにかくハプニングの連続で苦勞が絶えませんでした。チベットの植物は、日本のものと殆ど変わらないものから、全く異なるものまで変化に富んでおり非常に興味深く勉強させてもらいました。生態学のフィールドとしては、非常に素晴らしい所でした。しかし中国では研究、行動に多くの制限があり、登山同様研究の場としての中国の魅力を低下させているのが非常に残念でした。

なお、9月6・7日の両日、大阪国際交流センターにて「花と緑の国際シンポジウム」が開催され、大橋会長の閉会の辞により無事に終了しましたことを報告いたします。多数のご来場をいただき、有り難うございました。

日中友好学術登山隊調査経路

- 通過地および資料整理などで滞在した地点
- △ 調査地



★ ☆ ★

市大スポーツアソシエーション設立！

☆ ★ ☆

去る9月8日（土）午後3時より、田中記念会館に於いて「大阪市立大学スポーツアソシエーション」の設立総会が開かれ、山岳会からは、大橋会長以下清原、岡本、佐藤、小松の5名が出席した。

大橋会長を始め、各体育系サークルOB会の代表が発起人となり、設立の運びとなった。

総会では、大橋会長が議長を務め、設立趣旨・会則・事業計画・予算案・役員について提案が行われ、決定された。

（ 現在、市大スポーツは一部のサークルを除いて低迷しており、この弱体化に歯止めをかけ、サークル活動の発展を図る為には、我々OB会も、より積極的な役割を果たすとともに、一層の支援・協力を進めていく必要がある。しかしながら、単一のクラブOB会では限界があり、OB会が互いに協力し、力を合わせて取り組むことが重要である。こうしたことから、大阪市立大学におけるスポーツの振興と母校の発展のため、大学創立110周年を期に、OB会の連合会としての「大阪市立大学スポーツアソシエーション」の設立となった。

総会終了後には、大阪市長を始め、関係各方面からの祝辞も頂戴しながら、設立祝賀パーティーが行われた。

（企画運営委員 小松 稔）

山 行 記 録

（ 黒 雉 川 柳 又 谷

東京支部 片岡泰彦

「柳又谷」は黒部最大の支流である黒雉川を北又谷と二分する沢で、北又谷の美溪に対し、入口より連続的に始まるゴルジュと滝をもった荒々しい沢である。

山岳部員の頃よりその存在を知っていたが、先輩が過去に遡行した記録もなく、当時沢登りの実力もなかった部員にとって、近寄り難い沢であった。「状態が悪ければ無理をせずに引返そう」と固く誓い合う4人パーティが、平成2年8月25日黒部峡谷鉄道黒雉駅に降りた。

北又堰堤よりいよいよ草鞋をつけ、遡行が始まる。今年は水量が少ないはずとの予想は当たり、数回の渡渉で広河原に着いた。13時10分の早い到着であったが、

夜行疲れもあるのでテントを張ろうとの伴さん（経38年卒）の意見に全員一致。名越さん（46才）は北大OBの地質学者で、酒と自然をこよなく愛し、焚火をさせれば天下一。学生の頃は、雨が降っても焚火で炊事をしたという人で、さっそく大きな木を集める。梶田君（29才、神大OB）は、いつも手拭い姿が似合う蝶理の社員で、さっそく釣師となり、岩魚を3匹上げた。骨酒にして日本酒5合、ウィスキー2本を胃に注ぎ、星を仰いで柳又谷の神様に明日からの無事を祈った。

翌26日も晴。飛竜峡は巻き道のトラバースでザイルを使い、カシナギ峡は強い水圧が腰までかかる。部分的に嫌な渡渉をしながら、広くひらけた柳河原に到着。暫く行くと「死人谷」という支流が入る。誰がつけたのか縁起でもない名前だ。今日は中の廊下も突破して夕暮迫るまで歩いた。途中梶田釣師が35cmはある巨大岩魚を上げたのにはびっくり。さすが柳又谷。

27日。突然沢は狭まり、V字型のゴルジュの中から激流が迸る。上の廊下の入口であるが、小ナル谷よりクラガリ峡へ抜けようとブッシュ漕ぎを3時間。下降地点より見下ろすクラガリ峡は、深廊の滝が飛沫を上げ、雪渓はズタズタに切れている。穴があいて痩せている雪渓は、上を歩いても、くぐっても非常に危ない。滝を巻く為に草付まで這い上がるボルトも必要であろう。ガスも出て来たので深く引き返し、誰もいない赤男谷を詰めた。

充実した山行であった。平均年令40のパーティにすんなり白馬の源流まで通過させてくれる柳又谷ではなかった。難しさは下部水量と上部雪渓の状態に左右され、両方の状態に恵まれれば、割に簡単に行ける場合もあると思った。

- 8月25日 黒薙駅（8：15）→北又堰堤（9：50）→広河原テント地（13：10）
- 8月26日 テント地（6：50）→タンバラ谷（8：30）→柳河原（10：00）
→水谷（14：30）→火倉平テント地（16：30）
- 8月27日 テント地（7：00）→上の廊下入口（7：30）→下降地点（10：15）→赤男谷中流テント地（15：30）
- 8月28日 テント地（7：45）→朝日岳（12：30）→白高地沢（15：30）
- 8月29日 テント地（7：45）→蓮華温泉（11：00）

右膝の障害によりやく慣れ親しんできた。もう元通りにならないということへの悔やみもない。あり様のままに流れていくしかない。過去の全てを肥やしにして未来が立ち現れてくる。刹那としての現在が幾分未来に泌むようなそんなひとときを雪の黒部で過ごした。

私は先輩たちが為した1939年3月の黒部川S字峡横断に触発され、1976年以来冬春のほとんどをこの山域に費やした。都合18回訪れている。

S字峡、半月峡、十字峡、白竜峡、黒部ダム、平の渡し、下の黒ビンガ、上の黒ビンガを横断した。今、ようやく冬の雪黒部の魅力に開眼した。その最近の山行が今年の3月の単独行である。

こんな山行は昨今の流行とかけ離れていて、誰もやらない。その最大の理由は、豪雪の溪谷に都会風の華やかさが無いのはもとより、山行日数が多くなるためである。私のごとき異常なる社会人のみの遊戯だといっても過言ではない。少しの自負と羞恥をもって、山岳会諸氏にご披露しようと思う。

1990年3月21日。立山駅より常願川へ入山。旧立山温泉を経て、鳶山西尾根より五色ヶ原へ登り、刈安峠より平の渡しへ下る。計画では針ノ木西稜より蓮華東尾根下山だったが、悪天候と淋しさに日和り、ルートを南沢岳北尾根より烏帽子ブナタテ尾根下山と変更する。6日間の単独行であった。

単独行による黒部横断は初めてである。パートナーがいなかったというのも理由だが、今の自分の身体で山に登れるのか確かめたかったのが本当の理由である。

正月には雲の平から、上の廊下を横切り、薬師東面中央稜登攀という厳しい山行をパートナー岡本正人（会友）のリードでなんとか成功させたが、下山目前でヘリコプター収容という後味の悪い思いをした。だから、もし今回も遭難さわぎをおこしたら、登山者としての面目も通り過ぎて、社会的人間失格の烙印を押されかねない。（もう押されとるで！）だから計画決定には少々勇気がいった。

会社には休暇届けを出したら、呆れ顔で許可してくれた。山登りとは言わず、雪の黒部川の調査だといっておいた。

このルートは技術的に困難な所はないが、右膝に障害のある身、サポーターで固定はしているものの、一度のミスが命取りになる。単独行だから、動けなくなったら万事休すだ。この緊張感は以前の私には想像出来ぬ類のものだった。トランシーバーを持参しなかったのは非難されるかもしれないが、私にすれば自力、退路を絶つという心境だった。終わってみれば、やはり良くなかったなあと考

えている。

一番恐かったのは黒部川の渡渉だった。過去の記録では結氷していて雪原の横断になるはずだったのに、水位が20メートル程下がり、平の渡し付近は湖底が姿を見せていた。黒四ダム湖面の氷の残骸が厚さ30cm程の氷板のかけらとなって、河原や山腹の斜面に残留している。黒部川は渇水期とはいえ本流渡渉となると恐い。

三月の黒部の深谷で独りパンツ一枚になって渡渉する様は異様であろう。素足では水の中にも、ラッセルしても居場所がない。腰程の水量で、川幅は約30メートル、ストックを頼りに必死で渡った。もし押し流されて黒部湖の氷の下に流れ込んでしまっていたら、同情より笑い話のタネにされただろう。ましてパンツ一枚に満載ザックの姿では後世にとんだ恥を晒すことになっていたかもしれない。

単独行の淋しさは、この山域に輝かしい足跡を残した戦国の武将佐々内蔵助成政や近代登山のスーパースター加藤文太郎を想うことで紛らわした。今回のルートは多少の違いはあるが、おおむね彼らのルートに等しい。この迫体験であらためて彼らの偉大さを再認識したし、かりそめの同一感にどっぷりと浸って山登りを満喫した。

親子熊にも出遭った。溪谷の雨に凍えた。残照の薬師岳に如来の後光を見た。雪稜に刻まれた一条のトレース、私は自然というキャンバスに描いたつかの間の線刻絵画を自画自賛し陶醉した。人影はおろか、トレースのかけらもない完璧の静寂の山旅だった。

こういう山登りの快楽は登山のエスカレーションだけに身を焦がしていた時には知り得ないものなのかもしれない。不足を嘆き、出来ぬを憂うより、足るに満ち、出来るを楽しむ方が良いに決まっている。

今までは山の等高線ばかり見ていた。より高い困難なる絶頂こそ山だと思っていた。自然には深さもある、等深線もあるのだ。見上げる山と見下ろす谷は二つにして一つ、不可分な間柄だ。稜線を越えて入谷する雪黒部の地形が象徴的にそのことを示す。山の高さ（登山の魅力）は谷の深さ（人の想い）によって際立つということかも知れない。

ただ、パンジャブ平原の女帝ナンガパルバートは、取巻く溪谷の深度をも圧倒的に凌駕して君臨する。その岩と雪の世界がデモーニッシュに囁きかけてくる。やはり知足より渴望がアルピニズムの本質なのだろうか。

結句

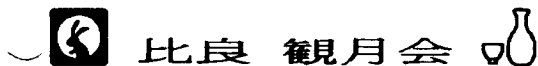
雪解けや 湖底の木々は 羅漢さま
白骨の 木肌に春の 冷雨降る
冬尾根と 春溪谷結ぶ ザラメ雪

1990年7月10日

補足 岳人500号に積雪期黒部横断研究と題して雪黒部を紹介した。
また「岩と雪」140・141号に厳冬期ハッ峰の研究を発表しました。
ご一読下さい。

企画運営委員

奥田 寛



9月15日～16日に比良高津小屋を利用して観月会が催されました。あいにく雨天となりましたが、総勢19名（大人17名、子供2名）の参加を得て、にぎやかで楽しい一泊二日となりました。概要は以下の通りです。

<第1日目>

11時8分に比良駅で下車し、小雨の中、川勝氏比良邸へ向かう。川勝夫人・藤本夫人の手料理で、たっぷり・ゆったりと昼食をいただき、このまま快適過ぎる環境の下、泊り込んでしまわないかと一抹の不安を覚える。午後2時を過ぎて、ようやく重くなった腰をあげ、車に分乗して比良リフト前へ向かう。雨は断続的に降り続けているが、雨の切れ目にロープウェイから琵琶湖を見下ろすと、対岸までクッキリと見渡せ、晴天時よりも眺望が良い！？ 八雲ヶ原ではテントがー張り。雨天のなか酔狂な、と思いつつ通過し、三々五々、高津小屋に到着する。夜は小屋直行組を迎えて夜更けまで飲み且つ食べ、と例のパターンとなる。トビックスは、寝込みを襲って得た28cmの岩魚と、神吉氏（80才）・泉氏（78才）による「掛け合い」会話。敬老の日に横山やすし・西川きよしコンビ顔負けの絶妙会話、一年分は優に楽しませていただきました。

<第2日目>

午前3時まで起きていた者、早々にダウンした者、いづれにしても雨天のため手持ちぶさたであり、元気一杯は神吉氏・泉氏コンビと子供たち。魚釣りで子供が出かけた他は誰も小屋から出ずじまい。午後2時に小屋出発、スキー場付近で松虫草、ワレモコウの群落に寄り道しながら帰途につく。JRに乗車してから皮

肉なことに天気は回復に向かう。

この度は、川勝さん宅で大変お世話になりました。有難うございました。又、藤本さんにはいつもながら大勢の食事の用意等お世話になりました。有難うございました。

<参加者>

(高6) 神吉、(学12) 泉、(学16) 三島、(経32) 川勝、および夫人、
(医33) 門田、(経34) 藤本、および夫人、(経34) 浅部、(工35) 上堂、
(経35) 中村、(法38) 岡本、(経42) 佐藤、(法43) 島川、(経44) 奥田、
(商45) 広瀬、および父君、子息(次男)、故後藤君の子息(長男)

四光峰の風について

四光峰の報告書「四光峰の風」を、先日ようやく発行することができました。皆様にももうご覧いただいていることと存じます。お世話になった方々への発送も完了し、続々とお礼状が寄せられておりますので、少しご紹介します。

↑従来のような(私共のものも含み)堅苦しいものでなく、大変楽しく読ませて頂きました。…ランタンリルンの悲報の際、蝶理の対策本部へお見舞いに参上したことを思い出しました…。(日本山岳会会長 山田二郎氏)

↑山が好きでいろいろな山岳会とおつきあいしておりますが、貴会のように御親切なご報告を受けるのは初めてです。…(衆議院議員 塩川正十郎氏)
また、隊員各自の行動表から、積分を使って分析してこられた数学の先生もおられました。

報告書の発行で、四光峰もやっと終了したという感でいっぱいです。今まで暖かく見守ってくださった会員の方々に改めてお礼申し上げます。有り難うございました。報告書の方は、まだ数に余裕がありますので、事務局までご一報下されば、実費にてお分けできます。(四光峰報告書編集委員 矢倉)

♡ ♡ 編集メモ ♡ ♡

いつも精鋭的な登山を続けておられる伴先輩、敬意を表します。皆様もどんどん原稿をお寄せ下さい。申し訳ありませんが、編集の都合上、原稿用紙3枚以内とさせていただきます。(矢倉 睦)

銅板碑の人々

三島義彦

銅板碑

「共に山にあそびし友ら とこしへにここに憩ふ」

と銅板に刻まれてある。

昭和61年10月8日－10日 泉隆次郎氏、佐藤耕三氏、藤本勇氏御夫妻、藤本拓氏、長谷氏、林氏、小林氏と三島で、前の中又白の下場所では谷は荒れていて老人には参るのにきついと言うことでやめて、奥又白谷の出合の下手、右岸の林の中、あまり人目のつかない場所をえらんで、石をつんで再建する。栗飯原氏も小川氏も西岡氏も森本氏も亡くなっているしで、再建してやれやれ一つの務めを果たした、肩の荷を下ろした思いであった。

この度のは佐藤氏が銅板の手配、書家への依頼、彫刻と共に資金を提供していただき、藤本氏御一家の方々に労力の提供、援助をいただく。

63年に積み増し補強する。

はじめの銅板碑は、昭和34年、福田源五郎氏の霊をなぐさめる為の碑を作ろうと言うことから戦地で亡くなられた、また病で倒れられた友を合祀しようと、そして生きている者も遅いか早いか何時かは入るのだから入れようと、泉氏、松村氏や大橋氏、森本氏、佐藤氏等の発議から、つながりの多かった人々が名を連ねることになった。昭和34年11月、奥又白谷をたどり松高ルンゼの落ち口の左の岩壁に、泉氏、福田氏、松村氏、森本氏、佐藤氏、萩野氏、浅部氏、宮本佳則氏、三島の手で、ノミで穴を掘って銅板をはめこむ。この銅板は松村氏が手配された。正面に蝶、大滝が見えて見晴らしの良い恰好の場所で、霊は喜んでくれるだろうと、残った者としての責任を果たした思いであった。昭和36年頃に、埋めこんだセメントが浮いてくずれ、銅板は落下する。この落下した銅板を、登っていられた方が見つけて徳沢園迄下ろして預けていただく。(見つけていただいた方は不明)。

預けられた碑を3年位たって、中又白の滝が大きく見える所、右岸の少し高い場所に、佐藤氏、泉氏、山本勝氏、橋本氏、近藤氏、山辻氏、伴氏、佐々木氏、三島他諸氏の手で石を積んでおさめる。

2年経ってお参りに行ったら見つけられず、記憶をたよりに上へ下へと探し廻ったが発見できず、その後二度ばかり行って探したが、結局見つけられず、設置した時ここなら雪崩にも大丈夫だろうと判断したのだったが、雪崩にでも流されたものと断定してあきらめざるをえないことになる。淋しいそして借りの年月が

つづいた後、佐藤氏の世話になって昭和61年に再建する。

銅板碑の人々 生存者には☆印を付してあります。

栗飯原健三 大市大 昭60.4 逝去。同好者の集まりから近代登山へ山岳部の運営を見守り、指導し、海外の登山情報を知らされる。終戦直後の日本山岳会関西支部の創設に参画され、三十有余年にわたり市大山岳会会長として尽力される。ノルウェーでは高い評価を受けられて勲章を受けられる。誠実な洗練された紳士。

☆福田源四郎 大薬専

福田源五郎 同志社 泉氏と中又白登攀の後、昭12.4.10 前穂で墜落遭難。

福田隆一 大市大 昭58.10.19逝去。京都一中卒、昭8年4月山岳部に入部。新しい近代山岳部の確立に参加。穂高、剣、厳冬の富士山、春の八ヶ岳、冬の乗鞍山に登頂。アルピニズム的登山に脱皮しつつある山岳部の山行に中心的に参加。

北条理一 O・K・Tクラブ 好日山荘に勤務、昭19.12 牡丹江で戦病死。無口な、学生の良き話相手、相談相手。北ア錫杖岳の岩場のパイオニア。昭20.8

長谷日南枝氏（西岡氏二女）が喪主。上田安子氏、大賀寿二氏、余部守夫氏等が友人として郡山での町葬に参列される。

☆平野義明 大市大

林 弘 大市大 昭20.6.18 沖縄本島国吉で戦死。酒も飲まず煙草も喫わず、すごい頑張り屋さん。ハヤッさんの愛称で、そのタフさに一目を置かれる。高商部より学部へ、努力家勉強家。第8連隊で教官の時、重機関銃をかついで長柄から隊まで先頭で駆足をして下士官の度胆をぬく。黙々と地道に歩き、サポートをがっちり引き受けられる。

端山修平 大薬専 昭50頃逝去。

入江保太 同志社 昭20.3逝去。

☆泉隆次郎 大市大

入江康行 大市大 昭20.7 ビルマで戦死。酒を愛し、読書に親しみ、レコードを鑑賞。休みは必ずのように山に入り、年間200日以上を数える。ただ勉強だけは余り得手ではなかったようだ。腕力人一倍強く、チンネ稜線でのアクロバット登攀、昭16年10月新村正一氏と組んで前穂四峰正面オーバーハングを直登し、新村ルートとして名を残す。コンビーフが好物、着物でよく会合に出席、良い雰囲気を持つ。鴨緑江源流、次高山系、積雪期黒部一雙六谷、黒部横断、北鎌、鹿島槍天狗尾根、早月尾根、奥穂高、毛勝猫又縦走、後立山縦走、西穂一奥穂、北鎌尾根一黒部源流、屏風岩、黒部上廊下、剣小黒部、中又白谷、外剣合宿、涸

沢合宿、奥又白合宿等々に参加、山歴を加える。頑張りぬく気力闘志、高い技術と山への愛は実戦と思索の両輪の上に完全な岳人として年とともにいよいよ深く山に入り、学生生活のすべてを山につくしたのは、次の運命を予知していられたのかとも思う。

☆池田正男 大市大

北村武一 大市大 昭20.7.30 フィリピンミンダナオ島で戦死。講堂の前の階段で背もたれを前にして椅子にまたがり、近代的登山とはアルピニズムとはと、アカデミッククライマーは当然最終目標をヒマラヤにおくべきだと説き、ハイキング程度の新人部員の度肝をぬく。理論家。統制と団結、サポーターメンバ―は犠牲を甘受すべきを浸透させ、ハイキングクラブから大阪商大山岳部への基礎を作られる。

刀原琢二 大市大 昭20.9.27 北京で戦病死。11年台湾、14年鴨江源流偵察。重態の中で、早く大阪へ帰って山の仲間と一緒に山へ行くことを楽しみにし、夢を見ていられた由。

近藤 榮 大市大 昭11.7 剣尾根で登頂後、三の窓のコルに居る仲間とコ―ルを交換直後、多分浮石でバランスをくずして墜落遭難。

片山良一 大市大 昭19.6.22 ビルマで戦死。ヒマラヤの続きの山を歩いている、これでもう死んでもよいの便りを最後にインパール作戦で亡くなる。豪放にして繊細な神経の持主。哲学者的雰囲気をもって細事にこだわらず超然とした面を持って、山に没入、近代的登山を実戦。昭16.3の関学との合同毛勝猫又縦走のリーダーを果たす。

☆岸田権二 同志社 現在有馬温泉療養所入院、療養中。

川本秀雄 大市大 昭20.1.21 華中武昌で戦死。ボタの愛称で山の仲間は勿論学内でも尊敬された存在。配属将校より出された断髪令に、髪の毛を短くすると山で落石の時怪我をするから丸坊主にはならないと頑張った彼も又自由を愛し山を愛して若き生涯を送る。戦争が烈しくなった17年にも3月西穂―奥穂、7月後立山、12月鹿島槍、3月奥又白より北尾根に入る。

久世東洋一 大薬専 戦死。年、場所不明。

松村健一 大市大 昭62.5.4 逝去。一家言を持ち、動ぜず後輩の指導にも力を尽くされる。ランタンリルン遠征隊隊長森本嘉一氏を会社より快く出され、後援激励される。

☆三島義彦 大市大

(以下 次号に続く)